

氏名・(本籍地)	杉山裕俊(千葉県)
学位の種類	博士(仏教学)
学位記の番号	甲第99号
学位授与の日付	平成27年3月16日
学位論文題目	『安楽集』の研究
論文審査委員	主査 林田康順 副査 佐藤成順 副査 金子寛哉

## 杉山裕俊氏 学位請求論文審査報告書

### 「『安楽集』の研究」

#### 論文の内容の要旨

本学位請求論文は、『安楽集』の研究」と題して、五章にわたって道綽の易行道往生説の構造とその独自性について論究するとともに、『安楽集』に関する従来さまざまな定説を批判的に再検討している。

第一章「『安楽集』における引用経論とその特徴」では、『安楽集』に引用される大乘諸経論を經典・律部・論疏ごとに分類し、その分類を通じて、『安楽集』における最も特徴的な引用経論が曇鸞の諸著作であることを指摘している。『安楽集』における曇鸞の影響は教判論・実践論・仏身論にとどまらず、菩提心や得生以後の議論にまで及んでいる。中国浄土教典籍のなかで、曇鸞の影響をこれほど色濃く残すのは『安楽集』のみである。ただし、道綽の浄土教思想は曇鸞とは全く異なる時代環境や教学背景のなかで思索を重ねて構築されたものとし、それは『安楽集』と密接な関係にある敦煌文献の『續述』との説示内容を比較することによって鮮明になるとしている。また、『安楽集』と『續述』の成立前後論に関して、本論では『續述』に『弥勒発問経』の引用や『摂論釈』の法身依止説による弥陀報身説の強調がみられること、ある

いは上品上生の階位設定、願行具足による別時意会通説、慈等の十念説など、後の長安浄土教へとつながる議論が散見されることから、『安楽集』以後に作成され、異なる学問的状況下において成立した文献であると結論づけている。

第二章「末法凡夫説を背景とした教判論の成立」では、道綽が仏道修行の実践的主体者として考えていた仏滅後第四五百年における末法凡夫の視点から教判論を再考している。第一節では道綽の教判論の前提となる衆生論について、当時の一般的な学説であった慧遠の凡夫説を概観し、そのうえで道綽の凡夫理解が善導のように大乘菩薩道の実践階位上の外に設定されるものではなく、慧遠と同様に菩薩の階位上に設定されるものであると指摘している。また輪廻無窮と深厚善根という二つの側面から道綽の凡夫説を再検討し、有相往生の機類として提示される新発意菩薩と発願往生心との関わりから、『安楽集』に説かれる輪廻無窮と深厚善根という二つの衆生論は決して分断したものではないと指摘している。すなわち、輪廻無窮とは願往生心を発す以前の衆生を表現したものであり、深厚善根とは輪廻無窮の衆生をして願往生心を発させ、新発意菩薩として仏道を歩ませるための契機であると考えられ、このような発願往生心を基点とした新発意菩薩以前から新発意菩薩以後への転換こそが、道綽の易行道往生説の出発点となると指摘している。第二節では法然以来、定説とされ続けてきた「道綽の教判＝聖淨二門判」という見解に疑問を呈し、末法凡夫説にもとづく難易二道判という視座のもと、道綽の教判論について再検討を行っている。特に道綽は曇鸞『往生論註』の難易二道判を引用しながらも、自らの仏教観にもとづいて時・機・教の一致の重要性を説き、阿毘跋致の速得ではなく、末法の凡夫が往生するために実践可能か否かという基準によって、往生浄土を目的とした独自の難易二道判を提示していることを明らかにしている。第三節では教判論に関連する問題として、曇鸞と道綽における自力・他力について比較検討を行い、道綽の自力・他力は曇鸞のように対概念として捉えるべきものではなく、易行道において一つの連続した関係にあることを指摘している。すなわち、道綽の易行道とは現生で菩提心を発し、西方浄土への往生を願いながら仏道修行を実践すること（自力）と、その結果、臨終時に阿弥陀仏の来迎（他力）を蒙ることによって往生するという二つの過程を経て成立するものであり、道綽がこのよ

うな自力・他力を提示した背景には、あらゆる大乘経論を典拠としようとする意図がみられると指摘している。

第三章「易行道の実践体系」では、易行道の実践者が修すべき念仏三昧の具体的な行実について検討を行っている。第一節では「道綽の念仏は曇鸞の十念論を継承、もしくは発展させた内容である」という従来の見解に対し、曇鸞の著作中にはみられなかった念仏と懺悔・滅罪・見仏との関連性に着目することにより、道綽が説く念仏には懺悔行や観察行といった礼懺儀礼としての側面が多分にみられることを指摘している。併せて、道綽が阿弥陀一仏を対象とした仏名行を提示した背景には、主に北朝から隋代にかけて盛行した仏名懺悔と阿弥陀仏信仰とのつながりが深く関与していることも指摘している。第二節では多くの研究者によって議論されてきた念仏三昧と五念門の関係について検討を行っている。ここでは称名念仏を徹底させるために五念門を採用しなかったとする先学の見解に疑問を呈し、『安樂集』には五念門を構成する一々の実践行が説かれていること、そして曇鸞の五念門解釈が諸処で依用されていることから、道綽は仏道修行としての五念門を強く否定しているわけではなく、むしろ五念門のように実践行を類別化せず、それらを阿弥陀仏一仏に対する念仏三昧に包摂することによって、願生者が修すべき実践行を一行化しようとしたのではないかと推察している。第三節では第四大門の内容を中心に念仏三昧の相状と利益を検討している。ここでは念仏三昧を称名念仏一行に限定すべきか否かという不可避な問題を視野に入れつつ、大乘諸経論に広く説かれる念仏三昧とは、道綽にとって菩薩行としても三昧行としても明確な典拠を有する仏道修行であり、一切行を内包した最勝の往生行となることを明らかにしている。また道綽の念仏三昧は阿弥陀一仏を対象としたあらゆる身体的行為の総称であるが、そこに包摂されるさまざまな実践項目に優劣を求めるべきではないと指摘している。さらに『安樂集』において念仏三昧の相続的な実践を意味する「常念」の用例を整理し、その語義概念と道綽の使用意図から、第一大門に示される「称仏名号」や「称阿弥陀仏」といった表現も単なる「称名念仏」ではなく、阿弥陀仏の名を称えながら礼拝行や観察行を実践する仏名行として理解すべきであると指摘している。

第四章「道綽の本願理解について」では、大乘諸経論を典拠とする道綽の

易行道往生説において、阿弥陀仏の本願がどのように扱われているのかを検討している。第一節では慧遠や吉蔵における願文の分類、さらには曇鸞の三願的証を概観しつつ、そのうえで『安楽集』に引用される四十八願の用例を再整理している。これらの基礎的な作業を通じて、①『安楽集』には曇鸞のように第十八、十一、二十二願を並列し、阿弥陀仏の本願力にもとづく大乘菩薩道の展開過程を説明しようとする意図はみられないこと、②原文を忠実に引用する曇鸞に対して、道綽は他の大乘経論と同様、願文にも大幅な改変を加えており、願文に対する両者の引用態度には大きな相違がみられること、を指摘している。続いて第九大門における諸願文の引用について考察し、道綽以前の諸師にはみられなかった浄土の莊嚴相を示す願文への着目がみられること、得生者の具体的な様相を本願から説明しようとする点には道綽の独自性が垣間みえることなどを指摘している。さらに道綽がこれらの願文を経証として提示した理由は、西方浄土への得生者が理想的な大乘菩薩の姿となることを明確に示唆するためであったと考えられ、併せて五つの願文の選定が曇鸞『讃阿弥陀仏偈』の教説を受け、道綽自身が『無量寿経』に説かれる諸願文の内容を精査した結果であると指摘している。第二節では道綽が最も多く引用し、後世の日本浄土教にも多大な影響を与えた第十八願文について検討を行い、『観経』下品下生との合釈文として理解されている第三大門末尾の第十八願文に関して、『安楽集』には複数の経論を統合し、それらを合釈したような引用文は他にみられないこと、あるいは道綽が九品全体に臨終時の念仏による往生を想定していることなどから、他の大乘経論と同様、末法凡夫の立場から道綽自身が『無量寿経』の願文を改変した取意文とみるべきであるとの見解を提示している。また、このような願文の引用状況から、『無量寿経』や願文のみを格別に重視するような態度は見受けられず、道綽の易行道往生説が決して阿弥陀仏の本願のみによって形成されたものではないことを明らかにしている。

第五章「易行道往生説の論理構造」では、本願論にかわる道綽の思想基盤について、『安楽集』全体を通底する二諦説（二諦大道理）に焦点を当て、道綽の易行道往生説が有する独自の論理構造を明らかにしている。第一節では『安楽集』における「二諦」の用例を整理し、道綽にとって第一義諦とは

法身や無相などと定義されるものであり、世俗諦とは色身相好や有相を指し、仏果にもとづいて顕現される仏の言説・慈悲・救済を包摂するものであると指摘している。また道綽は二諦説を『往生論註』の二種法身説中に自説として加えている点から、その内実が有相と無相の相即的な関係によって成り立つと指摘している。そして、道綽における二諦説は曇鸞のように有相と無相の相即的な関係を示すためのものではなく、念仏三昧による凡夫の有相往生という自らの易行道往生説が、二諦の大道理に順じた大乘仏教の要路であることを証明するためのきわめて重要な論理として用いられていると指摘している。第二節では二諦説を援用した道綽独自の仏土論である境次相接説について検討を行っている。はじめに、今日まで弥陀浄土低位説として評価されてきた弥陀浄土初門説を、易行道実践者の視点と二諦説の構造を踏まえたうえで再解釈し、道綽にとって阿弥陀仏の西方浄土が初門であることの意義は、現世から来世という往生の過程において、唯一、娑婆世界と時空間的に連続した相接の関係にあるという点であり、なおかつ二諦の相即的な関係から無相土にも該通する相土であることを明らかにしている。つまり、道綽は弥陀浄土初門説によって十方浄土と西方浄土の優劣を論じようとしているわけではなく、易行道の得生処は阿弥陀仏の西方浄土以外あり得ないと主張している。次に娑婆穢土末処説では、道綽が娑婆世界を穢土の末処と言いつつ得た理由として、釈尊の出現と不在の二点を指摘し、釈尊の遺教のままに念仏三昧を實踐して阿弥陀仏の西方浄土に往生すべきであるという道綽の真意を明らかにしている。

最後に、総結において論者は、これまで考察してきた道綽の易行道往生説を詳細に図示すると共に、

- ①いたづらに生死輪廻をくり返してきた輪廻無窮の衆生(第二章第一節)が、
- ②穢土の末処である娑婆世界(第五章第二節)において、仏滅後第四五百年の末法に生を享け、
- ③過去世の宿善によって浄土の教えに値遇し(第二章第一節)、
- ④阿弥陀仏の西方浄土へ往生することを願い求めることによって新発意菩薩となり(第二章第一節)、
- ⑤大乘諸経論が説くままに念仏三昧を實踐し(第三章第三節)、

- ⑥臨終時には阿弥陀仏の来迎を蒙り（第二章第三節）、
  - ⑦まずは有相土として具体的な莊嚴相を有する西方浄土へ往生して理想的な大乘菩薩となり（第四章第一節）、
  - ⑧菩薩の階位が進趣するにつれて有相土から無相土へと通入し（第五章第一節）、
  - ⑨無相土において第一義空を証得して仏果を獲得する（第五章第一節）、
- という一連の過程を指すものであるとしてまとめている。

### 審査結果の要旨

本学位請求論文（課程博士）は、「『安楽集』の研究」と題し、中国・隋唐代に活躍した道綽の著書『安楽集』における浄土教思想とその成立背景の解明を目的としている。中国浄土教において、『安楽集』による思想的な影響は唐代の文献である迦才『浄土論』や善導『観念法門』、懐感『积浄土群疑論』などに看取されるが、それ以降は、積極的な形で道綽の思想が援用された形跡をみることはできない。一方、日本浄土教においては法然が『選択集』第一章段の中で『安楽集』を典拠として一代仏教を聖道門と浄土門とに二分したことにより、注目されている。

『安楽集』の浄土教思想をめぐる近代以降の研究を概観すると、道綽の浄土教思想に関しては、教判論、衆生論、仏身仏土論、実践論などの問題を中心に研究が進められ、『安楽集』研究は20世紀中期から後期にかけて大きく展開してきた。しかしながら、佐藤成順氏による慧瓚とその門下に関する研究、西本照真氏による三階教の研究、吉津宜英氏による地論学派の研究をはじめ、道綽周辺の中国仏教研究そのものが大きく進展していく中で、『安楽集』研究は行き詰まりを迎えた感がある。

論者は、現在、『安楽集』研究が停滞している理由として、第一に道綽の伝記や『安楽集』の書誌に関しては先学によって現存する資料が整理され、これ以上新たな見解を提示することが困難な状況にあること、第二に『安楽集』の出典考証については内藤知康氏によって引用文一々の改変が指摘されていること、第三に道綽の浄土教思想についてはこれまでの研究の蓄積により一応の読解がなされていること、第四に従来の『安楽集』研究の多くが法

然を基点とした、いわゆる宗学的視点から論じられる傾向にあることなどがあげられる、と指摘する。

そうした中、論者は、これまでの『安楽集』研究の多くは、中国浄土教思想史の展開を一つの流れとして捉え、曇鸞から道綽、さらには善導へという浄土教の師資相承を前提としていることから、曇鸞の浄土教思想を継承した道綽という一面のみが評価され、中国仏教思想史上における道綽という視点から研究が行われてきたとは言い難く、道綽独自の教説や『安楽集』全体に通定する論旨については余り解明がなされていない、と指摘する。本論ではこうした研究視座のもと、道綽の浄土教思想が『安楽集』の論理構造が有する独自性を追究するとともに、中国仏教における『安楽集』の位置づけについて考察を施している。

そこで論者は、まず『安楽集』の成立背景を明らかにすべく、同時代に成立したとされる敦煌文献『無量寿観経續述』との引用経論の比較、さらには両者の成立前後論を通じて、『安楽集』という浄土教典籍が当時のさまざまな教学交渉の中で成立したことを確認しつつ、同時代の文献には全くみられない曇鸞への着目、すなわち曇鸞浄土教への回帰性というきわめて稀有な特徴を有していることを指摘している。次に道綽の浄土教思想について、①教判論、②衆生論、③実践論、④仏土論の順に検討を施している。①教判論として、道綽の教判を聖浄二門判とする従来の見解に疑問を呈し、『安楽集』第三大門の内容と曇鸞の難易二道判を確認したうえで、道綽が提示する教判とはあくまでも往生の難易性を基準とした独自の難易二道判であるということを論証している。②衆生論として、道綽にとって易行道の実践主体となる末法の今時衆生がいかなる存在であるのかを規定している。③易行道の修道体系としての実践論では、道綽が勸示する念仏三昧の背景には当時の中国仏教界における仏名行の隆盛が深く関わっていると推察し、易行道往生説の論理構造として、曇鸞と道綽における本願と他力の用例を整理し、本願および他力に対する両者の理解には少なからず相違がみられること、すなわち道綽の易行道往生説は曇鸞のように阿弥陀仏の四十八願のみによって形成されたものではなく、そこには『安楽集』全十二大門を貫く「二諦大道理」という絶対的な根拠があることを指摘している。④仏土論として、道綽独自の境次

相接説を取り上げ、今時衆生の立場から弥陀浄土初門説を捉え直すことにより、阿弥陀仏の浄土が「初門」であることの重要性を考察している。

以上、論者は、これまで個別に論じられてきた道綽の浄土教思想を、二諦の大道理によって裏づけられた易行道往生説として再構築し、『安楽集』において浄土教こそが大乗仏教そのものであると主張した道綽の真意を探りつつ、曇鸞とは全く異なる論理構造によって形成された浄土教思想という視点から、隋唐代の中国仏教における道綽の存在意義と『安楽集』の価値を改めて問い直しており、『安楽集』研究の新たな地平を切り拓く貴重な成果である。

口述試問、並びに、委員による審査会においては、①全体的に、いたずらに道綽思想の独自性を追い過ぎている傾向があるのではないかと、②総結において言及される、－1) 本願成就身としての報身説ではない、－2) 教学背景に地論南道派が存在していたことが想定される、という道綽思想の根本的理解に関わる説示が希薄である、などのいくつかの改善点が指摘された。もちろん、こうした点については、本論の総結にも言及されていることであり、筆者自身の意識に留められていることは言うまでもない。こうした点の解決はたいへんな作業となろうが、早急にならず、論者自身のライフワークとして着実に進めていただくことを大いに望むところである。そうした地道な作業こそが、論者自身が語っている「中国仏教においても希代の阿弥陀仏信仰者である道綽の浄土教思想をさらに綿密に解明してゆくことであり、新たな道綽像の確立となるであろう。いずれにしても、本論文において、道綽『安楽集』を取り上げ、その思想背景と教学体系を捉え、その全体的思想構造を明らかにした取り組みは、今後の道綽研究、あるいは、道綽以後の浄土教研究の礎となる成果であり、課程博士論文として相応しいことを述べて審査報告とさせていただく。